

実エンドウ早生系統「4-1-1-1-2」の特性

1. はじめに

本県の実エンドウの主要品種である「きしゅうすい」は、高品質、多収であるが、晩生で、種子の低温処理や幼若期の長日処理などで開花促進処理を行う必要がある。このため、開花促進処理を行わずに栽培できる早生品種の育成に取り組んだ結果、有望と思われる系統を得たので紹介する。

2. 育成経過

平成元年に「きしゅうすい」とキヌサヤエンドウの品種「美笹」を交配し、世代を進めF₆で個体選抜を行った。その後、系統栽培した早生系統の中から、莢が比較的大きいものを選抜した。さらに、この系統について選抜をすすめ、特性調査、生産力検定等を実施した。その結果、「4-1-1-1-2」を有望と認めた。

3. 特性

(1) 生育

秋まきハウス栽培では、11、12節から開花が始まり、「きしゅうすい」の種子低温処理を行ったものより8節程度低い。節間長は、同程度である。

(2) 莢の品質

莢は「きしゅうすい」より長い。莢の厚みは薄い、幅は反対に広く、やや扁平である。

子実の大きさ、一莢当たりの粒数および粒重は、ほとんど差がない(表1)。

むき身率は、いずれも約40%とほぼ同じである。上物率は、11~1月の収穫前半は「きしゅうすい」より高い。しかし、全期間を通じては反対に低く、これは、3~4月に側枝成りが主体となり、莢が小さくなるためである(図1)。

(3) 収量

11~1月の初期収量が「きしゅうすい」の1.5倍程度と多い。2月に収穫の谷間を迎え、収量は低下するが、その後は側枝についた莢が増加し、3~4月の収量が増加する。総収量は、「きしゅうすい」より少ない(図2)。

4. おわりに

「4-1-1-1-2」の秋まきハウス栽培では、早期に追肥を行い草勢を維持すると同時に、側枝を早い時期に確保して後半の収量を増加させる必要がある。また、この系統は初期収量が多く、莢が大きいのが特徴であるため、露地の夏まき年内どりの作型に適していると思われる。現在その適応性について調査を行っているところである。

(育種部 小畑 利光)

表1 供試系統・品種の莢・子実の特性 (秋まきハウス栽培)

系統・品種	莢長 (mm)	莢厚さ (mm)	莢幅 (mm)	子実大きさ (mm)	粒数※	粒重※ (g)	莢重※ (g)
4-1-1-1-2	92.1	16.2	16.8	10.6	6.0	4.3	11.0
きしゅうすい	89.2	16.9	15.7	10.7	5.8	4.1	10.9

※:一莢当たりの数値

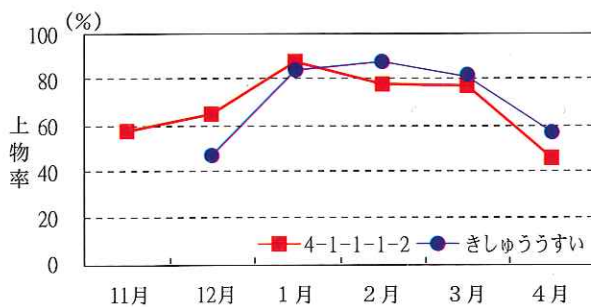


図1 秋まきハウス栽培での上物率の推移

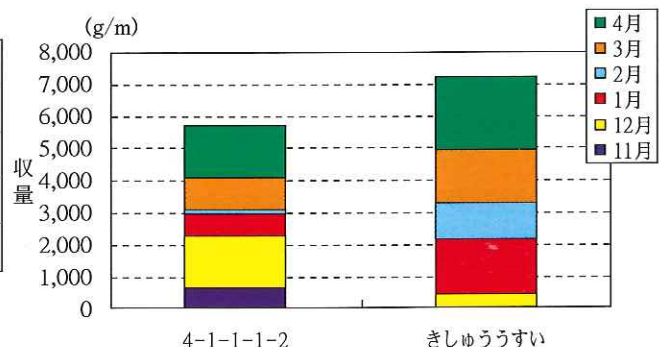


図2 秋まきハウス栽培での月別収量 (平成11~12年)